

新聞を読むスタンダード：『エゴチスムの回想』執筆とその背景

栗須, 公正
南山大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/1430751>

出版情報：Stella. 32, pp.165-188, 2013-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

新聞を読むスタンダール

——『エゴチスムの回想』執筆とその背景——

栗 須 公 正

はじめに

1832年6月、イタリアの領事であった49歳のスタンダールは『エゴチスムの回想』執筆に着手している。これは1821年から1830年にかけてパリに滞在した時のことを書こうとした自伝的試みであったが、実際には初期の1821-22年の回想で終わっている。

1830年の7月革命後、スタンダールはトリエステ領事に任命され、11月末任地に赴くが、オーストリア宰相メッテルニヒに領事認可状を拒否され、翌年3月までトリエステに留まったのち教皇領チヴィタヴェッキアに転任する。『赤と黒』の出版は30年11月前半の任地への旅行中のことであるが、身分の不安定だった同時期、彼のうちにはすでに己の生涯を書き綴るという計画が胚胎していた。

「エゴチスム」は英語から由来した単語で、スタンダールの時代には自己についてのみ話す慎みのなさを非難する語意として解されていて、彼自身も軽蔑をこめてこの言葉を用いていた。それにも拘わらずスタンダールがこの作品のタイトルにこの否定的な印象の「エゴチスム」という一語を入れたのは、1人称主語の「私」をふくむ文章を連ねて自己を語ることへの釈明の意か、自嘲気味の思いがあるからであろう¹⁾。それと同時に、わざわざこの問題の語を使ったのは、作家にとって嫌悪すべき従来の「エゴチスム」から抜け出して、人間の心を真摯に描く新しい「エゴチスム」を試みようという秘かな意図があったにちがいない²⁾。

スタンダールはこの作品の第1章で、「私は自分自身が何ものであるかを知らない」と書いている³⁾。そして自己の真の姿を知るために10年前に戻り、サロンの登場者たちや、それに関係のある人々を当時の感覚を蘇えらせながら描い

ていくわけだが、ここでまことに興味深いのは、『回想』に登場する人物たちの何人かは、執筆にとりかかった1832年6月時点で健在だったことである。さらに彼らは同年5月から6月にかけてフランスの新聞報道の対象になっており、イタリアにいたスタンダールがそれを読むことができたという事実である。

では、『エゴチズムの回想』と新聞にはどのような関連があるのか。スタンダールは『赤と黒』で『ガゼット・デ・トリビュノー』の報じるベルテ事件、ラファルグ事件を材源としているが、作品のなかでも密書に関する章でこの新聞名をそのまま使っている⁴⁾。『回想』でもスタンダールは同じように登場人物に関係する新聞名を挙げるのである。まず第4章でフィリップ・ド・セギュールについて、1832年5月の『ジュルナル・デ・デバ』を見よ、と指示する。これを起点として、5月下旬の『デバ』と『ナショナル』の争い、『デバ』のオディロン・バロ、ラ・ファイエット批判が明らかになる。次に第5章では、ド・トラシーが連隊長をつとめる国民軍砲兵連隊解散の勅令に触れている。これは新聞名こそ出ていないものの、解散の勅令が載ったのは1832年6月7日号の『モニトゥール』であり、この号は同時にランゲーの6月5日・6日事件報告記事を掲載しており、それをきっかけとして『ナショナル』のランゲー攻撃が始まるのである。10年前を「回想」したという作品に登場する人物が作家の読む現在の新聞記事に出ている、その関係は検討する価値があるだろう。

またスタンダールが王政復古時代、フランス新聞の熱心な読者であったことは、匿名でイギリスへ送った雑誌記事の内容や、前出の『赤と黒』の材源となった新聞『ガゼット・デ・トリビュノー』の存在によってよく知られている。7月王政時代になっても新聞への関心は変わることがなかった。イタリアの領事となった作家にとって、フランス新聞は重要な情報源であったのである。この当時スタンダールは、政府から配達される各紙以外に、反政府系の『ナショナル』『コンスティテューションネル』、独立紙の『フィガロ』および『ヴォールル』を個人として予約購読していた⁵⁾。『回想』には政府系の『デバ』の名はよく出てくるのにもかかわらず、これらの予約購読までして読んだはずの新聞の名は出てこない。メッテルニヒの警察が目光らせているイタリアで、原稿に反政府紙の名前を入れることには警戒の念があったのであろう。しかしスタンダールは両派の新聞をよく読み、『回想』のなかで描かれるこれらの登場人物が1832年5月・6月にどのような状態に置かれていたかを知悉していたのである。作

家を読み得た記事、知り得た状況を確認しながら、『回想』執筆の背景を明らかにするため、以下3章に分けて論じることにする。

1. フィリップ・ド・セギュールと1832年5月の報道

酷評されたフィリップ

『エゴチスムの回想』第4章でスタンダールは、ナポレオン帝政下で皇帝に仕えたセギュール父子に触れている⁶⁾。作家の敬愛する哲学者デステュット・ド・トラシーに対し失礼なことがあった、として、父親の方のセギュール伯爵に憤慨してみせるのだが、やがてその怒りの矛先は息子の方に転じる。スタンダールの文章を読んでみよう——

その息子のフィリップは親父に輪をかけて下らない奴で、わが軍のロシアにおける悲運を一書に著わしてルイ18世から勲章をもらった。この破廉恥漢フィリップ・ド・セギュールは、今後もバリで私が最も憎む性格の典型として挙げるに足りるだろう。つまり、一生の運命を決めるような行動を除き、何事によらず体面に忠実な体制派なのだ。最近このフィリップが〔故〕カジミール・ペリエ首相に対して務めた役割（1832年5月の「討論」紙を見よ）は、かつて彼がナポレオンに対して務めた役割と同じものだ。その結果として彼はナポレオンの寵を得、しかもあれほど卑劣なやり口でナポレオンを見捨てたあと、またしても、この種の下劣な連中に取巻かれるのが好きなルイ18世の寵をも得たのである。〔…〕破廉恥という言葉はたしかに当を得たものでないと思うが、このフィリップ・ド・セギュール流の下劣さは、私にとって何とも我慢のならぬものだった。〔…〕フランスでは、誰もが彼の下劣さを悟り始めている。⁷⁾

このようにスタンダールは、子息の方のフィリップ・ド・セギュールに対して酷評を加えている。

しかし文中にもある通り、セギュール將軍は1824年、ナポレオンのロシア遠征について著作を刊行している。スタンダールはイギリスの雑誌へ送った匿名記事のなかで、何度かその出版の反響を報告し内容の紹介も行っている。彼は「將軍フィリップ・ド・セギュール伯爵著『1812年におけるナポレオンと帝國陸軍の歴史』の著しい成功は、旧来の文学思想に致命的な一撃を与えている」⁸⁾というような賞讃に近い文章を書いている。ちなみにこの頃、未だドイツにいたハイネもこの書には大いに惹かれたようである⁹⁾。ともかく、スタンダールにとってこのような好意的な時期もあったことを考えると、前述の酷評は何に

由来するののかという疑問が生じる。

『ジュルナル・デ・デバ』4月20日号、5月22日号について

スタンダールは、前述の第4章のなかで「最近このフィリップが〔故〕カジミール・ペリエ首相に対して務めた役割」に触れ、1832年5月の『ジュルナル・デ・デバ』紙に言及している。それについてはアンリ・マルチノーが『回想』校訂版（1941年刊）の校註のなかで、『デバ』がセギュール関連の記事を載せているのは4月20日号と5月22日号であることを指摘し紹介している¹⁰⁾。4月20日号についてマルチノーは、前日の貴族院におけるフランス亡命外国人居住法案の最終審議におけるセギュール伯のカジミール・ペリエ政府擁護演説に触れ、この政府への信頼と感謝の念を示すその演説の一部を引用している。マルチノーは5月16日のペリエ首相の逝去後におけるセギュール伯の行動も伝えている。伯爵は内閣が主導する公的募金によるペリエ記念碑建立の実行監視委員会の一員となり、5月21日、書簡を添えて300フランの寄付を行う。この書簡の文面と寄付金の金額は『デバ』5月22日号に発表される。『デバ』紙上には、亡き首相の業績を言葉を極めて賞讃し、愛惜の念を示すセギュール伯の手紙が載ったわけであるが、青年期を過ぎてからペリエに厳しくなったスタンダールを知るマルチノーは、イタリアの地で作家はどのようにこの賞讃の手紙を読んだだろうと言いながら手紙の文面を引用している。

『ナショナル』4月20日号について

『デバ』はこのように2回にわたってセギュール伯関連の記事を発表した。注目すべきは、反政府紙『ナショナル』が『デバ』の扱っているこの2つの論題に対し厳しい反論を行っていることである。『回想』においてスタンダールがセギュール伯に辛辣な批判の言葉を浴びせていることをみると、この反論が大いに彼を触発したと考えられる。

『ナショナル』紙は1830年1月に創刊され、ブルボン王朝と戦うブルジョワ自由主義を支持したが、7月革命後は、分裂したオルレアン派のうち、改革を主張する「運動派」の側に立ち、1832年には共和主義の色彩を明確にしていた。いっぽう『ジュルナル・デ・デバ』紙は、憲法の正統性に基づく現状維持を求め「抵抗派」を支持し、ギゾー、ペリエなどの信頼を得ていた。

『ナショナル』の1832年4月20日号は「ポーランド人亡命者予防法案の貴族院採択について」という記事を掲げ、前日の法案の審議、特に、フィリップ・ド・セギュールの演説を非難している。この新聞は、外国人居住者について既に適用可能な法があるのに、なにゆえ今、新法を作るのかと疑問を投げかけ、それがポーランド人亡命者取締りのための法案であることを指摘し、政府を批判する。

ポーランドは7月革命の影響を受けて1830年11月にロシアに対して反乱を起こし独立宣言を行うが、翌年2月にロシア軍に進軍され9月にワルシャワが陥落する。フランスは国内でさまざまな議論があり、結局、積極的な介入ができなかった。ワルシャワ陥落後、多くの亡命者がフランスに流れこみ、政治問題となっていく。首相カジミール・ペリエの『演説集』(1838)を見ると、ポーランド人亡命者対応について代議院、貴族院での演説を行っており、それに対し政府のポーランド放棄を責める反政府派からの攻撃を受けている¹¹⁾。

『ナショナル』は、このポーランド人亡命者を危機にさらす法案の採択に強い不満を抱いているのであり、政府案を強力に支持して採択を決定づけたフィリップ・ド・セギュールの政治姿勢になかば嘲笑のまじった批評を試みている。セギュールの政府側多数派である中庸派への媚びを見抜いており、「政治における紳士と極悪人」の関係について述べ、穏和な中庸派が変貌する可能性をほのめかす¹²⁾。この記事における「極悪人」という言葉の連発は、あたかもセギュール伯を指しているようであり、スタンダールの「破廉恥」の連発と呼応しているように見える。『エゴチスムの回想』におけるフィリップ・ド・セギュールへのこの厳しい評言には、『ナショナル』の記事の影響がはっきりと感じられる。

『ナショナル』5月23日号について

『ナショナル』5月23日号は、『ジュルナル・デ・デバ』が展開している前首相カジミール・ペリエの記念碑のための募金について、彼がそれに値する政治家かどうか疑問を投げかける記事を発表している。

さらに、次のような前書とともに、前日の『デバ』5月22日号に発表されたセギュール伯の書簡(前述)を転載している――

ペリエ記念碑募金応募者が『ジュルナル・デ・デバ』に寄せた書簡のうちで最も目

立つものの一通は、セギュール伯の書簡である。というのも、前の議国会期中、〔ペリエ内閣の〕3月13日体制を守るため伯爵が発言したときの大袈裟な調子でそれが書かれているからである。

スタンダールは、この前書を読んで我が意を得たりという心境であったにちがいない。『ナショナル』は、この書簡転載のあと、もうひとつ別のセギュール伯の書簡を前書とともに掲載している。以下の文面である――

準正統王位体制〔オルレアン王家の7月王政〕に参加される前、セギュール伯爵殿は、純粋正統王位〔ブルボン王家〕の回復にもまた大変熱心に参加されていた。以下は『モニトゥール』1814年4月11日号掲載のものである。

《仮政府あてセギュール伯爵殿の書簡》

「小官は、父祖伝来仕えた王家の後裔である後継者の王〔ルイ18世〕に、1,600名の近衛兵と小官の身命を捧げるものである。

小官は、我が士官たち、全ての我が近衛兵たちの名において、また我が名において王に忠誠を誓うものであり、我が誓いに責任を持つものである。

將軍セギュール伯爵 近衛第3連隊大佐」

この書簡は如何なる状況で書かれたものであろうか。同年4月はナポレオン帝国崩壊の末期であった。3月31日、外国軍がパリも占領し、ナポレオンはフォンテーヌブローにいて反撃の機会をねらっていたが、元老院・立法院は皇帝廃位を決議し、軍隊では将兵の離脱がひろがっていた。ナポレオンは4月6日、退位宣言を行い、20日にフォンテーヌブローを発ちエルバ島に向う¹³⁾。ナポレオンの行動を1日単位で追った『日日録』とでも言うべき年譜（ジャン・テュラール、ルイ・ガロス共著、1992年刊）で探してみると4月11日前後はナポレオンに未だ身の処し方に迷いが残っていたようで、12日の夜には毒を仰いだり助かったようである。よく知られたフォンテーヌブローの近衛兵との別れは4月20日であり、その時にはナポレオンは毅然とふるまっていた¹⁴⁾。ブルボン王家の後継の王、ルイ18世がパリに到着するのは5月3日である。セギュール伯爵は早々と転向を表明し、しかも『モニトゥール』にそれを公表し身の保全を図ったのであろう。

こうしてみると、最初に引用した『回想』の文章のなかで、「彼はナポレオンの寵を得、しかもあれほど卑劣なやり方でナポレオンを見捨てたあと、またし

でも、この種の下劣な連中に取り巻かれるのが好きなルイ 18 世の寵をも得た」という一節は、まさしく『モニトゥール』4月11日号掲載のセギュール書簡の内容そのものである。スタンダールはセギュール伯爵批判の糸口として5月の『デバ』をほのめかすが、実際に作家に告発の真のエネルギーと着想を与えているのは『ナショナル』の記事だったのである。

2. オディロン・バロ、ラ・ファイエットと1832年5月・6月の報道

再び『ナショナル』5月23日号について

前章で引用したこの反政府紙『ナショナル』5月23日号には、ペリエ記念碑募金に反対する記事、およびセギュール伯爵の秘密を暴く書簡が掲載されていた。だがそればかりでなく、この同じ5月23日号には『デバ』と『ナショナル』の対立を深める発端となる記事が載っていた。それは前日の反政府派議員集会の報告である。22日、ラフィット邸に集まった議員39名は、ペリエ没後もペリエ体制が続く政治の現状打破を求める議論を続け、「フランスの現況とその統治方法」について、同郷の選挙民たちに「報告書」として知らせるという結論に達する。議員は「報告書」を見て各人独自にこの会への加入を決断することになる。「報告書」起草委員会として、シャルル・コント、コルムナン、ラ・ファイエット、ラフィット、モーガン、オディロン・バロの6人が指名される。さらに記事の終わりには参加者の名が列記されていて、これらを眺めていると、『エゴチスムの回想』に登場する人物が含まれていることに気づく。『回想』第2章のオディロン・バロ¹⁵⁾、第5章のラ・ファイエット將軍¹⁶⁾、子息のジョルジュ・ラ・ファイエット、哲学者の子息ド・トラシーなどである。また同じく第5章に出てくる共和主義者フランソワ・ド・コルセルの父、代議士ド・コルセルもこの集会に参加していた。このうちバロを除く面々はいずれも、1821年哲学者デスデュット・ド・トラシーのサロンでラ・ファイエット將軍を囲む共和主義的な人々である。

バロとラ・ファイエットについては、スタンダールはトリエステにいた1831年3月1日、パリのマレスト宛の手紙のなかで、政治的に信頼できる人物として引用している。支持するラフィット内閣の弱体化を見てのことだろう。この友人に対し作家は、ドミニック（作家自身を示す変名）なら首相を頼まれても

困らない、ちゃんと腹案があるから、と仲間同士の政治談議のなかで自らの内閣構想を洩らし、閣僚の筆頭にバロ、国民軍司令官にラ・ファイエットの名を挙げるのである¹⁷⁾。1830年の7月革命で、シャルル10世を倒すのに協力した人々はその後7月王政に加わるわけだが、やがてラフィット、ラ・ファイエット、バロなどの革命の徹底をめざす運動派と、ギゾー、ブロイ、ペリエなどの革命の進展を阻止する抵抗派に分かれる¹⁸⁾。バロは運動派の理論家として1830年10月頃からギゾーらと対立する¹⁹⁾。1831年3月1日の手紙で作家は抵抗派に飲み込まれようとしている運動派内閣の運命を意識してバロとラ・ファイエットの名を書き、運動派支持を示しているのである²⁰⁾。このふたりの人物は、前述の「報告書」起草委員会に属し、1832年5月下旬の報道で最も注目されるが多かったため、次にその報道と『回想』との関連を眺めてみたい。

『デバ』のバロ、ラ・ファイエット批判

1832年5月22日のラフィット邸の集会については、翌23日、前述の『ナショナル』だけでなく、『コンスティテューションnel』と『デバ』も報じていた。『デバ』はさらに24日、25日にもこの集会に言及し、激しい攻撃を加える。特に25日の記事では、反対派の主要メンバーに閣僚になる資格があるか検討し、オディロン・バロについては人望の不足から不適格性を宣言する。これに対し『ナショナル』26日号は「ラフィット集会の有益性」という記事で反駁する。『デバ』28日号は、若者たちを誘惑する『ナショナル』の共和国思想を非難し、93年の共和派の方がアメリカ型の共和派よりよく物が見えていたと述べ、ラ・ファイエットも標的とした。同じ5月28日、ラフィット邸で新しい集会が行われ、参加者は「報告書」発表文面に同意、署名した。『コンスティテューションnel』は集会の概要を個人名など伏せながら29日号に発表する。

『デバ』5月30日号は、この『コンスティテューションnel』の記事を分析しながら起草委員会を批判する。執筆者陣については、バロが主要執筆者と断定し、この会への加入者増加を考えるとバロにとっての問題は、起草委員のなかに存在する共和主義思想の色を薄めることだと指摘し、ここでもラ・ファイエットを標的にする。さらに、会議の3番目の発言者は匿名だがラ・ファイエットだと断定し、その発言内容を転載・批判する。この転載記事のなかに、7月革命のおりルイ・フィリップ王となる前のオルレアン公爵に、アメリカ合衆国政

府をモデル政府とし共和主義制度をもつ王制を勧めた話が出てくる。『デバ』はこの懐旧の物語の繰り返しを揶揄する。アメリカの共和制をモデルにしながら、王制を共和制に変え共和国実現を行おうとしているとして、ラ・ファイエットの政治観を現実性がなく危険なものと断罪するのである。

『報告書』は5月30日に『ナショナル』『コンスティテューショナル』に発表される。『デバ』5月31日号は、この文書について「前の議国会期の間、反対派から聞かされた演説の冗長で退屈な要約でしかない」と切り捨て、バロ氏は演壇の語り口の方が軽快だった、ラ・ファイエット氏は演壇で話すときのエスプリが少しもない、などという言葉から始まり、以下厳しい批判に満ちた記事を載せている。

これ以降6月には、『デバ』はペリエ基金の寄付の金額、『ナショナル』は「報告書」への賛同議員の数をたがいに競い合う状況になっていくのである。

『回想』におけるオディロン・バロ

『回想』第2章でスタンダールは、ナポレオン帝政時代の昔の同僚で今は貴族院議員のダルゲー伯爵から入場券をもらい²¹⁾、1820年8月19日事件の裁判予審を貴族院で傍聴した話を書いている——「法廷で私は初めてオディロン・バロ氏を見た。青髭の濃い小男だった。氏は弁護士として、この哀れな馬鹿どもの一人のために熱弁をふるっていたのだが、この馬鹿どもときたら、こんな突飛な行動を起こすのに必要な勇気の3分の2か4分の3しか持ち合わせてはいくせに、陰謀に加担したのだ。オディロン・バロ氏の論理は私を打った」²²⁾。

この陰謀は、1820年2月13日のペリ公爵暗殺のあと政治保守化のなかで、リベラル派系結社が連合してフランス各地での一斉蜂起による政権転覆を図ったが失敗に終わったもので、ラ・ファイエットの陰の仲介も明らかになっているようである²³⁾。被告は同郷のドーフィネ人ジャン＝バチスト・デュムランであったが、スタンダールはこの陰謀失敗者たちに腹立ちを感じている。彼らの軽率な動きについては、「しくじったジャコバン（過激革命派）ほど醜いものはない」（『赤と黒』第2部第8章）という言葉が思い出されるどころだろう²⁴⁾。しかし作家は、事の成否以上に「この馬鹿ども」の勇気の欠如に腹を立てている気配がある。スタンダールは、パリの6月の蜂起で勇敢に戦い倒れた若者たちに同情を寄せる『ナショナル』の6月9日号を読んだばかりだったはずである。

1821年の裁判を回想し、怒りを新たにしたのであろう。

『ナショナル』6月7日号によれば、バロは6月5日事件の折には、事件再発を防ぐため、反対派議員の代表としてラフィット、アラゴと共に王に謁見を求め長い会談を行っている。この会見に対する政府側のギゾーの証言には冷ややかなものがあるが²⁵⁾、スタンダールはセギュール伯と対照的なバロの一貫した政治姿勢をよく知っており、反乱がほとんど鎮圧された状況での、見方によっては滑稽でさえあるこの一途な行動に好意を抱いているようにみえる。作家はただ一行「オディオン・バロ氏の論理は私を打った」と書いている。メリメの「H. B.」によれば、スタンダールは想像に支配され唐突な行動をとりながら論理の尊重を口癖にした²⁶⁾。論理にあこがれるこの作家が書いたこの一行は1821年だけでなく、1832年のバロにも向けられた讃辞であるに違いない。

『回想』におけるラ・ファイエット

『エゴチスムの回想』第5章に描かれたラ・ファイエットは暗い陰謀とは遠い人物に思える。スタンダールは彼を「プルターク英雄伝中の人物」に喩え、「氏はいきあたりぱつたりの生き方をする人で、大して才智があるわけでもなく、いわばエバミノンダス流に、折があればその場その場で偉大な行為をなしとげてゆく人物だった」²⁷⁾と言っている。

さらに、『デバ』5月30日号が指摘するラ・ファイエットの共和国実現への固執も『回想』では姿を現さない。ラ・ファイエットは政治について「国民軍風の紋切型の考えをあまり気の利かぬ文句で説明」するのである――

かくかくの政府はよき政府である――すなわち、市民に街道通行の安全、裁判の公平、かなりの見識をそなえた裁判官、額面通りの価値をもつ通貨、一応の道路整備、外国人に対する適切な保護等々を保証する政府のみがそれである云々。²⁸⁾

スタンダールは「よき政府」の説明の後に、「そんなふうに行けば、ことはそうこみ入った話でもない」と付け加えている。研究家シャルル・シモンは「よき政府」の部分に関する論文のなかで、作家の付け加えた一文がたいへん奇妙だと言っている²⁹⁾。では一体、何についての文章なのか。作家はラ・ファイエットを共和国に執着する政治家として策略の影を読み取ろうとする人々に対して、彼のあの国民軍風の無骨な語り方で語ることが複雑であるはずはないだろう、

と言っているのだ。スタンダールはラ・ファイエットの登場する『回想』第5章を6月23日に執筆している。作家は5月下旬から翌月上旬にかけての、ラ・ファイエットと彼の属するグループへの『デバ』あるいは政府紙の記事を読んでいた。そして1821年、22年を書きながら、1832年を意識せざるを得なかった。1821年の『回想』を書きながら「ラ・ファイエット氏は、75歳といういい年をしながら、私と同じ欠点をもっている」などと、75歳などという1832年における年齢を書いてしまうのだ。

スタンダールは「一党の主」としてのラ・ファイエットの姿を、その欠点もふくめて率直に描いている。そして次のような讃辞も書いている——「フランス、ことにパリは、偉人を偉人として認めなかったという点で、後世ひどい譏りを免れないだろう」。さらに、「フランス大革命の世紀（1789-1832年）を特徴づける性格のひとつ」として「山師根性」をあげ、「現今山師根性を超越した高みにあるのは、ラ・ファイエット氏あるのみ」と書く³⁰⁾。そして何度か示されている1821年のこの人物への賞讃は、期せずして1832年6月の状況でのラ・ファイエット支持の表明となっている。

3. ジョゼフ・ランゲーと1832年6月の報道・再論

6月の『ナショナル』『モントゥール』

『エゴチズムの回想』におけるジョゼフ・ランゲーについては、本誌『ステラ』第30号掲載の拙稿のなかで、1832年6月発表のランゲーに関する記事を資料として紹介した³¹⁾。今回さらに新しい資料を加えて考察を進めたい。まず、これまでの資料に関する説明から始めることにする。

スタンダールは『エゴチズムの回想』の第8章・第9章でランゲーについて語っている。作中では彼をメゾネットと呼んでいるが、彼は1817年以来の親しい友人であった³²⁾。ランゲーは、警察大臣ドカーズに見出されたのをきっかけに官界に入り、歴代の首相の下で働くことが多く、政治に著しく精通しているが、同時に自らも政治の二面性を備えている人物であった。スタンダールはこの奇妙な人物の特性を私生活もふくめて探り、彼の生きる信条は何かを求める。ランゲーは1832年、ペリエ首相の下で働き、その没後内相モンタリヴェの下で仕事をしていた。スタンダールは、この年のランゲーについて『回想』のなか

で詳しく触れることはない。しかし同年6月の新聞には彼の名が登場していたのである。6月5-6日、パリで起きた蜂起事件の折³³⁾、翌日の政府官報紙『モニター』は、反徒を鎮圧し勝利をおさめた政府側の立場から華々しく事件の詳細を報じる。反政府紙『ナショナル』同月8日号は、この記事の執筆者をジョゼフ・ランゲーと断定し、過去の執筆歴からこの人物に、政府紙で6月5日事件を報告する資格はないとする。それに対し同月9日の『モニター』は、『ナショナル』の情報の誤りを正すとともに、ランゲーの政府協力・社会活動、さらには政治観にまでわたる記事を掲載し、ランゲーの経歴・思想を明らかにする³⁴⁾。

以上の通り『モニター』6月7日号の記事が起点となって、『ナショナル』『モニター』の間にジョゼフ・ランゲーを巡っての応酬があったのである。

『ナショナル』6月11日号について

では、新しい資料とは何か。それは『ナショナル』6月11日号に掲載されたランゲーに関する記事である。『ナショナル』はこの記事に前書を付けている。そのなかで『モニター』同月9日号の「ランゲーの政治的・文学的生涯の一部を提示」する覚書は、ランゲー自身が執筆したものだとして断定している。さらに、同紙は以下に示す記事が他から送られてきたが受理することにした、というのは、「この記事が真実であることがわかっているから、また、我々の敵が用いる手段がどのようなものかお知らせしたいからだ」と書いている。つまりランゲーを攻撃する文章は他からの寄稿である、という説明である。本文で最初に指摘されるのはランゲーの二面性である。『モニター』6月9日号で、ランゲー氏は『タン』紙へ1829-30年に編集協力したと自慢しているが、実際には、そこで月2,000フランもらって自由主義者を装い、いっぽうでポリニャック内閣からは1,000フランもらって記事を送り、しかもこの二重支払いの発覚を警戒して『タン』紙への受領証にはプチという偽名で署名していた、というのである。またギゾーから王政復古時代年金を受け取っていたことも明らかにしている。さらにランゲー氏は権力者が金を払えばいつでも使える男だと強調し、7月革命の折の報道人が結束した署名表のなかに彼の名はない、ということも指摘する。くわえて氏がドカーズ、ヴィレール、ギゾー、ペリエと次から次へと大臣たちの下で働き、『モニター』で半ば公的な記事を書いているこ

とを明らかにする。そして最後に、6月9日の記事をランゲー自身の弁明文とみなす論者は、氏は自分がシャルルマーニュ校の教師の身分からいかにして脱出したかを明らかにすべきだったろう、と書くのである。

この匿名の投稿文を読むと、それがいかにほどに事実か否かは別として、記事の筆者はランゲーの経歴にからむ闇の部分を衝こうとしているのであり、『ナショナル』はそうした方法により『モントゥール』の牙城を崩そうとしているのである。『ナショナル』としては、反乱の鎮圧という明白な勝利をおさめた側につく『モントゥール』に対しては、こういう戦い方が必要だったのであろうし、また政府寄りの記者としてのランゲーの存在が目障りであったのであろう。では、スタンダールはこの記事をどのように読んだのであろうか。

6月の報道とともに『回想』を読む

スタンダールは『エゴチズムの回想』を1832年6月20日に書き始めるが、翌日の6月21日には『ナショナル』の6月11日号を読む可能性があった。少なくとも執筆初期にはこの記事を読んでいたであろう。作家はこの時期、6月5日事件以後のパリの状況に強い関心を抱いていたらしく、『ナショナル』を熱心に読んでいる。たとえば同月26日、チヴィタヴェッキアのタヴェルニエに宛てた手紙には、『ナショナル』の最新号だけは着き次第ローマに郵送してほしいとあり³⁵⁾、いつもは荷馬車の御者に託すこともあっただけに、この一件にかんしては関連情報を強く求めていた様子が窺われる。

スタンダールがランゲーについて本格的に論じるのは『回想』第8章と第9章で、執筆も終わりに近い7月2日・3日であった。何故このようにランゲーの登場が遅れてしまったのだろうか。他の理由も考えられるだろうが、おそらく『ナショナル』6月11日号の政府から金を受け取り「身を売った」男ランゲーへの攻撃に対し、作家自身、この人物について心中で納得のいく説明が欲しかったのではないか。

『回想』の第8章で、メゾネット、つまりランゲーについて語り始めたスタンダールは、メゾネットが大臣から簡単な指示で「然るべき政治的命題を論証するため、高雅かつ冗長な文章を一晩のうちに30頁も書き上げられるという点」で何人かの「御用作家」と共通したところがあり、数人の首相に仕えてきたことを最初に明らかにする。すなわちこれは『ナショナル』6月11日号が強調し

ていた問題をスタンダールも正面から扱っているのだ。ただし作家は違う取り組み方をしており、こう言う——「奇妙なのは、というよりほとんど信じがたいことだが、メゾネットは自分の書くことを本気で信じている」³⁶⁾。さらに、大臣たちに仕えるのだが、「次から次へと上司に惚れこんでしまい、それも命も投げだしかねないほどの打ち込みようだった」³⁷⁾ と言うのだ。このようにスタンダールは、メゾネットが単なる「御用作家」でないことを少しずつ明確にしていく——

何度となく、私はメゾネットの正体を見抜こうと試みた。論理性の全き欠如、時として現れる良心との妥協、生まれ出ようとする微かな良心の呵責の圧殺、そうしたものがそこにみられるように思った。それもこれも、みな「生きなければならぬ」という一大公理にもとづくものだった。³⁸⁾

『回想』執筆の初期、6月21日あたりに『ナショナル』6月11日号のランゲー攻撃を読んだとすれば、スタンダールはまた新たにメゾネット [=ランゲー]の正体を見抜こうと試みたのではないだろうか。

作家は6月23日、出版社のアンリ・デュピュイに書簡を送り、政府の官吏であるかぎり何も公刊しない決意を知らせる³⁹⁾。彼はすでに1831年2月にも友人への手紙のなかで、自らの地位を守り、権力ある人々との関係を保つために、もはや何も公刊しない決意をしたことを知らせている⁴⁰⁾。教皇領国の宰相の地位にあるベルネッティ枢機卿がその支配する土地にいる自分の職務に対しどのような意向を持っているか強く懸念し、5月末にメリメから激励の手紙をもらったりしたことがあった⁴¹⁾。また『社会的地位』は『回想』よりあとの作品だが、こうした作家の官吏の立場への意識は、恩給をもらうためだけのために何の野心も抱かず、ローマで10年過ごそうと思っている『社会的地位』の主人公ロアザンを想起させる。こうして眺めてみると、ランゲーに関する「生きなければならぬ」という一大公理の発見は、6月23日の出版社への書簡で官吏としての公刊の断念を再確認したことが作用したのではなかろうか。自らの生き方に重ねてランゲーの生き方の公理が浮かび上がってきたのであろう。

メゾネットと義務の観念

『回想』第8章では、さらにメゾネットの義務の観念に言及している——「メ

ゾネットには市民の義務などという観念はまったくない。そういうものに対する彼の考え方は、私が人間と天使との関係について考える場合と似ている」⁴²⁾。「メゾネットは、ちょうどドミニク〔スタンダール自身を指す〕が宗教上の義務と無縁であるのと同様に、市民の義務とは一切縁がない」⁴³⁾。というようにスタンダールは、メゾネット自身執筆した『モントゥール』6月7日号の文章の最後の一文を指しているのである。メゾネットは自らの政治への協力に触れながら、大革命から42年後、フランスは望んでいた3つの事柄を手に入れた、すなわち自ら選んだ王朝・憲法・中産階級の勝利であると述べ、「今日こうした事柄の秩序を維持することが良きフランス人の義務である」と結ぶ。

スタンダールは、6月5日の蜂起を鎮圧しパリ戒厳令を発令した政府の論理を思わせるこの文章に反発している。パリ戒厳令の勅令は『モントゥール』6月7日号に掲載されるが、勅令の前文となる報告書のなかで、内相モンタリヴェは、王に忠誠を誓う「良きフランス人」「高邁なる市民」に言及している。当時メゾネットはこの内相の下で働いていたのである。スタンダールは2度、メゾネットにおける「市民の義務」の観念の不在を主張するが、2度とも自らの宗教との関係を引き合いに出している。「良きフランス人」の「義務」などについて書いてしまったメゾネットに対する揶揄が何となく感じられる友人らしい言い方である。

『ナショナル』6月11日号の記事は、メゾネットが首相・大臣の下で使われていたことを暴露するが、仕えた政治家のなかには首相ヴィレール（在職1822年9月-1828年1月）も入っている。『回想』第8章では、メゾネットとヴィレールの関係についてこう書いている——「メゾネットには、討論新聞〔ジュールナル・デ・デバ〕の編集者流の、卑劣で底深い悪辣さとか、徹底した偽善性とかいったものがなかった。従って『討論』紙の連中は、あれほど実務家肌のヴィレール氏がメゾネットに1万5千だか2万フランだかの多額の手当をやっていると知って、大いに憤慨したものだ」⁴⁴⁾。『デバ』紙の連中は「馬鹿扱い」していたメゾネットがもらっている手当に眠れぬ思いをした、というのである。『ナショナル』では、年金などの額は別にして、少なくとも表に出てくる額は千フラン単位の話をしている。それに比べスタンダールは、実務家ヴィレールの万単位の高い評価を示し、メゾネットが単なる御用作家でないことを明示しているのだ。

メゾネットと王の観念

『回想』の第9章では、スタンダールは、「メゾネットが本心から『王』という言葉に愛着を感じていること」に驚き、「フランス人にとって、何とすばらしい言葉だ。この『王』っていう言葉は！」⁴⁵⁾ というメゾネットの讃嘆の言葉を書きとめている。

前述した通り、『ナショナル』と『モニトゥール』の応酬のきっかけになったのは、後者6月7日号のメゾネット執筆の記事である。これは6月5日事件の報告記事であり、王ルイ・フィリップがサン・クルーからパリに到着し、6日朝から行った各所巡回と閲兵を報じている。兵士たちは「王よ、我らを信頼あれ。明日には終らせませすぞ」と誓い、民衆は熱狂して「王万歳！ ルイ・フィリップ万歳！」を叫ぶ。王の勝利が印象づけられる記事であり、スタンダールは『モニトゥール』を読み、メゾネットの筆になるものと見抜いていたに違いない。

メゾネットの出発点と到着点

『回想』第9章でスタンダールは、メゾネットの経歴の出発点について触れている――

1811年にはメゾネットは修辞学の教師をしていて、ローマ王生誕の日には自発的に生徒に休みをやったものだ。1815年には、ブルボン王朝擁護のための政治的パンフレットを書いている。ドカーズ氏はこれを読み、彼を呼び出して8,000フランの報酬で御用作家にしてしまった。⁴⁶⁾

『ナショナル』6月11日号のメゾネット攻撃の最後は、彼がどのようにしてシャルルマーニュ校の教師から脱出したか（そして御用作家になったか）を明らかにせよ、というものだった。スタンダールは実に簡略に答えている。要するに、ドカーズが彼の才能を発見したということなのである⁴⁷⁾。かくのごとくスタンダールは、とりとめもない書き方をしているようでいて、そのじつ『ナショナル』のメゾネット攻撃をしかと受け止めているのである。

『回想』第9章で、メゾネットの存在について次のように書いている――

今では、メゾネットは一国の首相にとってなかなか重宝な存在だ。いわば生き字引といったところで、1815年から1832年にかけてパリで行われた政治的駆引の裏の裏

まで、どんな小さな事柄でも、完全にしかも間違いなく知っている。⁴⁸⁾

スタンダールは、あれほど非難されていたメゾネットには隠れたる、しかも揺るぎのない優れた資質が備わっていることをはっきり認めている。メゾネットすなわちランゲーを単なる「身を売った」作家として片づけたくなかったのである。政治の二面性の間に身をおいて、モラルにとらわれず自由に生きるメゾネットの姿は作家の心を惹くものがあり、それ故にこそ彼の生きる公理を求めようとしたのである。ミシェル・クルーゼが指摘するごとく、メゾネットこそまさにスタンダールの世界的世界の住民と言えるであろう⁴⁹⁾。

結びに

以上、『エゴチスムの回想』執筆と同時代の新聞情報との関係をながめてきたが、ここで、『エゴチスムの回想』というタイトルについて補足しておきたい。「回想」という言葉の発想がどこから出てきたかという問題についてである。この言葉が使われたひとつの例をあげてみる。

1832年5月22日『ジュルナル・デ・デバ』は、次のような新刊案内の記事を載せている。「シャルル・ノディエ氏の新著『青春の回想』は、パレ・ロワイヤルの版元ルヴァヴァスール書店において発売中である」⁵⁰⁾。『デバ』5月22日号は、ペリエを礼讃するフィリップ・ド・セギュールの書簡を掲載している号であり、スタンダールが1832年5月の『デバ』を見よ、と示しているまさにその号なのである。彼がすでに同号掲載のセギュール書簡を読み立腹しているのは事実であり、さらにルヴァヴァスール書店というのは1年8カ月前に『赤と黒』を出版した出版社である。スタンダールがこの記事に気がつかないはずはないのである。

このノディエの新刊書の出版案内は、同じ日の『ナショナル』5月22日号にも掲載されている。『デバ』と同じ版元の出版情報によるもののようだが、『ナショナル』のほうが少し詳しい。記事の冒頭に「ルヴァヴァスール書店はシャルル・ノディエ氏の新著『青春の回想』を発売予定である。この新著は『マキシム・オダンの回想録』を抜粋したものである」⁵¹⁾ というが、ここでは「回想」が「回想録」の一部、つまり、人生のなかの一時期の記録として提示されている

るのである。さらに「ノディエ氏はこの著書のなかで、世間の人々が知らないような彼自身を書いている」と言う言葉に次いで、「絶えず心が舞台の上にあるような若者の回想」の内容を説明し、「フランス語の名作と肩を並べる作品」と推賞する。スタンダールはこの紹介文を読んでどう感じたのであろう。ノディエについては過去にそれなりに評価していた時期もあったが、これより数年後の『アンリ・ブリュラルの生涯』第41章では、「シヤルル・ノディエ流の機知、退屈な機知」⁵²⁾などと醒めた言い方になっている。スタンダールはこの紹介記事を読んで、「私」の溢れる、つまり「エゴチスム」の充満する「回想」に反発を感じ、自ら独自の「回想」を編み出すために、自作のタイトルに「エゴチスム」の語を採ったのではないだろうか。

作家は、『回想』第1章に、1カ月前からこの自伝的試みと小説創作の間で迷う自分の姿を示している。執筆1カ月前は5月20日である。それから迷いを越えて、チヴィタヴェッキア発信の6月12日付ドメニコ・フィオーレ宛書簡で、1821年から1830年のパリ滞在時のことを執筆中と書いているが⁵³⁾、実際にローマで『回想』を書き始めるのは6月20日であった。『デバ』『ナショナル』両紙の5月22日号がチヴィタヴェッキアに到着するのは5月末ごろであっただろう。迷っていたスタンダールが新刊紹介の新聞記事を目にし、そこから何らかのひらめきを得て、自作のタイトルに取り込んだ可能性は小さくあるまい。

スタンダールは10年前の回想を行いながら、たびたび執筆の年、時には執筆の月にまで言及する。作家はこのように絶えず回想する自己の姿を書き留めているのである。

だが不思議なことに、『回想』第1章で自らの政治的関心に言及しているにも拘わらず、6月20日の2週間前にパリで起きた大きい事件、6月5日・6日の蜂起事件には一言も触れていない。しかしながら本稿第3章で見たように、事件の渦中にいるランゲーのことを『回想』に描くことで、スタンダールは十分に事柄の本筋を捉えていることが浮き彫りになるのである。

いっぽう新聞についても、反政府紙を個人購読しながら、それらの紙名を筆にすることはない。1832年5月・6月の状況について、作品中で新聞名をはっきり出しているのは、政府系の『ジュルナル・デ・デバ』5月22日号のただ一例のみである。『回想』第4章の「1832年5月の『デバ』を見よ」と読者に呼びかけているのがそれである。だが4月・5月の『デバ』を併せて眺めてみて

も、スタンダールのフィリップ・ド・セギュールに対しての酷評の根源は明白にならない。同時期の『ナショナル』を照合して初めて全てが明らかになるのである。つまりスタンダールの読者へのサインは巧妙にずらされているのであり、容易に事実を見極められない仕組みになっている。さらに、こうしてあぶり出された『ナショナル』5月23日号には、『回想』の登場人物たちの名前が記事のなかにも、反政府議員の集会参加者リストのなかにも出ており、それが『デバ』との論争の出発点になっていく。身辺のスパイを警戒しながら用心深く執筆を続けるなか⁵⁴⁾、この一例の出し方こそが、スタンダールの作家としての真骨頂なのである。言葉にしたものは氷山の一角であり、その下には多くの情報が潜んでいるということは何気なくほめかしているのだ。

1832年5月22日の『デバ』と、勅令掲載という事実から新聞名と発刊日が分かった『モニトゥール』6月7日号の2紙を起点として、『回想』の登場人物たちの同時期の状況が明らかになることは本論の各章で述べた通りである。スタンダールは、こうした情報を入手しながら回想を続けていたのであり、その内容は1832年5月・6月の状況を照合しても違和感がなく、明らかに執筆時に登場人物たちの現況を心得ていたと感じさせる（このように執筆の材源に新聞情報が潜む点で、『回想』の生成構造は『赤と黒』〔第2部「密書」の各章〕のそれに近似している）。メゾネット（＝ランゲー）回想で作家は、愛読紙『ナショナル』のメゾネット批判に抗し、自らの政治信条とは違う側に位置する同者の真価を示そうと努める。スタンダールにとって彼はマレスト同様に政治の師のごとき存在であり⁵⁵⁾、己の信条とは異なる現実を理解・受容する方法を教えてくれた人物でもあった。作家はまさにその教えに順って当のメゾネットに柔軟な反応を示すのであり、この異質なものへの理解こそがやがては『リュシアン・ルーヴェン』の政治観察へと結びついていくのである。

『エゴチスムの回想』は、一見すると現実との直接的関与を避けた作品のように映るが、新聞材源の観点からは決してそうではなく、同時代の生の情報を豊富に秘めている。スタンダールの特徴である小説と自伝の密接な関係を考える上でも、未だ検討すべき点の多い作品といえるであろう。

註

- 1) 「エゴチスム」の語義については、主として次の資料を参照した——STENDHAL, *Souvenirs d'égotisme*, in *Œuvres intimes II*. Édition établie par V. DEL LITTO, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1982 et *Œuvres intimes I*, *op. cit.*, 1981, pp. XVI-XXVIII (préface); *Souvenirs d'égotisme*. Nouvelle édition établie et commentée par Henri MARTINEAU, Paris: Le Divan, 1941, p. XVIII sqq.
- 2) スタンダール『エゴチスムの回想』(富永明夫訳), 富山房「富山房百科文庫」, 1977年, X頁。以下, 引用に際しては必要に応じて改変・補足を行った。なお本稿執筆にあたり, 本訳書の「解題」における「エゴチスム」に対する深い考察及び「回想する自己の現在」に関する含蓄のある示唆に大いに触発された。以下の訳書・研究書を参照した——『エゴチスムの回想』(小林正訳), 『スタンダール全集』(桑原武夫・生島遼一編集)第12巻, 人文書院, 1971年収録; 中川久定『自伝の文学——ルソーとスタンダール——』, 岩波書店「岩波新書」, 1979年; Michel CROUZET, *M. Mysself ou la vie de Stendhal*, nouvelle éd., Paris: Éd. Kimé, 2012; Béatrice DIDIER, *Stendhal, autobiographe*, Paris: PUF, 1983; Béatrice DIDIER, «Le manuscrit des *Souvenirs d'égotisme*», in *Stendhal. Écritures du romantisme I*. Études réunies et présentées par Béatrice DIDIER et Jacques NEEFS, Saint-Denis: PUV, 1988, pp. 73-106; *Stendhal et les problèmes de l'autobiographie*. Textes recueillis par Victor DEL LITTO, Grenoble: Presses universitaires de Grenoble, 1976 (notamment, «Le moi et ses figures: *Souvenirs d'égotisme* et *Vie de Henry Brulard*», par Gérard RANNAUD); フィリップ・ルジュンス『フランスの自伝——自伝文学の主題と構造』(小倉孝誠訳), 法政大学出版局「ユニベルシタス」, 1995年; H・R・ヤウス『挑発としての文学史』(轡田収訳), 岩波書店, 1976年。
- 3) 『回想』富永訳, 前掲書, 6頁。
- 4) Voir STENDHAL, *Le Rouge et le Noir*. Édition de P.-G. CASTEX, Paris: Éd. Garnier frères, 1973, p. 361. 『回想』第9章でも1831年のこの新聞を引用している。
- 5) 新聞受領に関する問題については, 拙著『スタンダール——近代ロマネスクの生成』, 名古屋大学出版会, 2007年, 199頁以下(イタリアのスタンダールとフランスの新聞)を参照。なお, パリで刊行された新聞がローマのスタンダールの許に到着するのに何日を要するかについて2つの例をあげる。第1の例は, 『エゴチスムの回想』第5章での次の文である——「1週間前〔1832年6月〕国王ルイ・フィリップは国民軍の砲兵連隊の解散を命じたが, ヴィクトール・ド・トラシー氏はその連隊長だった」(富永訳『回想』, 前掲書, 68頁)。この部分の原稿は6月23日に執筆されている。いっぽうルイ・フィリップの砲兵連隊解散の勅令は『モニトゥール』6月7日号, 他の新聞は6月8日号に掲載されている(勅令の日付は6月6日)。したがって, 第5章の「1週間前」は, 「1週間前にこの勅令を新聞で読んだ」の意味である

- う。この表現に忠実に従えば、6月23日の1週間前の6月16日、スタンダールは勅令を読んだことになり、『モニトゥール』なら（発刊日を入れて）10日、ローマ到着に要したことになる。第2の例は、チヴィタ・ヴェッキアの領事館のリジマック・タヴェルニエがローマのスタンダールにあてた1832年7月26日の書簡である。「『ナショナル』『コンスティテューション』7月15、16日合併号を今朝受けとられたことと思います」（STENDHAL, *Correspondance générale* [abrég. : C.G], IV, Paris : Honoré Champion, 1999, p. 483) という文面であり、この両紙は発刊日（7月16日）をふくめて11日を要したことになる。以上、『モニトゥール』の到着は早いのが、よく登場する『ナショナル』などの11日（発刊日を入れて）をひとつの目安とした。もちろんこれは配送が正常であった場合である。
- 6) 父親は Louis-Philippe, comte de Ségur (1753-1830), 息子は Philippe, comte de Ségur (1780-1873). 両者の経歴については次の著書を参照—— Henri MARTINEAU, *Petit dictionnaire stendhalien*, Paris : Le Divan, 1948, pp. 443-448.
 - 7) 『回想』富永訳, 前掲書, 42-44頁。フィリップ・ド・セギュールは、1825年5月にレジヨン・ドヌール勲章をもらうが、シャルル10世からの授与であった。ルイ18世(1824年9月没)というのはスタンダールの思い違いである (voir *ibid.*, p. 446)。
 - 8) STENDHAL, *Chroniques pour l'Angleterre. Contributions à la presse britannique, 1824-1825*, t. V. Textes établis et commentés par K. G. MCWATTERS. Traduction et annotation par Renée DÉNIER, Grenoble : Publications de l'Université des langues et lettres de Grenoble, 1988, p. 43 (Lettre I, «Paris, 18 décembre 1824»).
 - 9) H・R・ヤウス, 前掲書, 182頁および276頁(註)参照。
 - 10) Voir *Souvenirs d'égotisme* [éd. 1941], *op. cit.*, p. 31 et n. 121.
 - 11) Voir *Opinions et discours de M. Casimir Périer, publiés par sa famille*, vol. IV, Paris : Chez Paulin, Libraire-éditeur, 1838, pp. 3, 37, 92, 108, 315, 321 et 441 (Chambre des députés, session de 1831 : 19 et 30 septembre 1831 ; 22 et 26 octobre ; 21 février 1832 ; 2 mars / Chambre des Pairs, session de 1831 : 28 novembre 1831).
 - 12) 「政治における紳士と極悪人 les honnêtes gens et les scélérats en politique」, 「破廉恥 infâme」(形容詞の infâme は scélérat の同意語である。Voir *Le Petit Robert I*)。なお、両紙とも大革命における「政治」を例に引いている。
 - 13) 『フランス史・2』(柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦編), 山川出版社, 1996年, 449-450頁参照。
 - 14) Voir Jean TULARD et Louis GARROS, *Itinéraire de Napoléon au jour le jour. 1769-1821*, Paris : Librairie Jules Tallandier, 1992, pp. 447-449.
 - 15) オディロン・バロ Hyacinthe-Camille-Odilon Barrot (1791-1873) —— 弁護士, 政治家。1820年代, 自由主義的反政府派活動家。7月革命参加。セーヌ県知事 (1830年8月-1831年2月)。7月王政時代 (1830-1848), 代議士, 王朝的左翼指揮。内閣首相 (1848年12月-1849年10月)。バロ内閣に外相として参加したアレクシス・

- ド・トクヴィルの『回想録』（邦訳名『フランス二月革命の日々』（喜安朗訳）、岩波書店「岩波文庫」、1988年）にバロに関する記述が多い。
- 16) ラ・ファイエット将軍 Marie-Joseph, marquis de La Fayette (1757-1834), général et homme politique. 次の資料を参照——MARTINEAU, *Petit dictionnaire stendhalien*, *op. cit.*, pp. 284-286 ; 樋口謹一「両世界の英雄・ラファイエット」、桑原武夫編『フランス革命の指導者』所収、朝日新聞社「朝日選書」、1978年、25-60頁。
 - 17) C.G., *op. cit.*, IV, p. 56. ピエール・マルチノーはこのマレスト宛書簡のバロ閣僚案に注目している。Voir *Souvenirs d'égotisme*. Texte établi et annoté par Pierre MARTINO, Paris : Imprimerie Nationale (copyright Éd. Richelieu), 1954, p. 159 et n. 5.
 - 18) 「抵抗派 la résistance」と「運動派 le mouvement」については次の文献を参照——Félix PONTEIL, *L'Éveil des nationalités et le mouvement libéral*, Paris : PUF, 1968, pp. 305-306 ; *Mémoires postumes de Odilon Barrot*, Paris : Charpentier, 1875-1876, t. I, pp. 203-204 (cités dans Pierre ROSANVALLON, *La Monarchie impossible. Les chartes de 1814 et de 1830*, Paris : Fayard, 1994, pp. 142-143). アンヌ・マルタン＝フュジェ『優雅な生活（トゥ＝パリ）——パリ社交集団の成立 1815-1848』（前田祝一監訳、前田清子・八木淳・八木明美・矢野道子訳）、新評論、2001年、224頁および225頁（訳注1）。
 - 19) Voir Philippe VIGIER, *La Monarchie de juillet*, Paris : PUF, coll. « Que sais-je ? » 1962, p. 19 ; Guy ANTONNETTI, *Louis-Philippe*, Paris : Fayard, 1994, pp. 633-636.
 - 20) スタンダールの運動派支持については CROUZET, *M. Myself*, *op. cit.*, pp. 477-478 を参照。
 - 21) ダルグー伯爵 Antoine-Maurice-Apollinaire, comte d'Argout (1782-1858). マレストの従兄であり、ドーフィネ出身。1819年、貴族院議員となり、のち大臣、フランス銀行総裁など歴任。『リュシアン・ルーヴェン』の内相ヴェーズのモデルと目される。1832年6月には、商業・公共事業大臣として、官報紙『モニター』6月7、11、17、18、19、20日号に、ルイ・フィリップの勅令発布に関連してこの大臣の名が報じられている。『デバ』の募集していたペリエ記念碑建立募金には、300フランのセギュールに対し500フランの寄付をしている。ダルグー伯の大鼻は有名でドミーエの諷刺画の対象になっている（喜安朗編『ドミーエ諷刺画の世界』、岩波書店「岩波文庫」、2002年、32-35頁）。1832年6月の状況から見ると、『回想』第2章での、信条の全く異なるバロとダルグーの登場は面白い対比である。なお、ダルグー伯は別名ダルベル氏として第9章にも登場する。
 - 22) 『回想』富永訳、前掲書、28頁。
 - 23) ラ・ファイエットの事件関与については次を参照——G. de BERTIER DE SAUVIGNY, *Au soir de la Monarchie. La Restauration*, troisième édition revue et augmentée, Paris : Flammarion, 1974 (1955), pp. 170-171.
 - 24) 『赤と黒』第2部第8章の指摘については次を参照——*Souvenirs d'égotisme* [éd.

- 1941], p. 20 et 195 (n. 78).
- 25) Voir François GUIZOT, *Mémoires pour servir à l'Histoire de mon temps*, Paris : Robert Laffont, 1971, p. 194 sqq.
- 26) クロード・ロワ『スタンダール』(生島遼一訳), 人文書院「永遠の作家叢書」, 1957年, 225頁参照。
- 27) 『回想』富永訳, 前掲書, 57頁。
- 28) 同上, 58頁。
- 29) Voir Charles SIMON, «Nouveaux inédits de Stendhal», in *Éditions du Stendhal-Club* (1922-1935), n^{os} 1-35, Genève : Slatkine Reprints, 1974 (n^o 28, 1930, pp. 12-13). シャルル・シモンは, スタンダールがデステュット・ド・トラシーの著書『法の精神』注釈に1829年2月26日の日付で, 当時の恋人アルベルト・ド・リュバンプレに捧げた, 上記の文章とよく似たメモを書きつけていることを明らかにしている。
- 30) 『回想』富永訳, 前掲書 58頁および 80頁。
- 31) 拙稿「1831年, 1832年のスタンダール——流動する歴史の傍らで——」, 『ステラ』第30号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 2011年12月, 117-148頁参照。
- 32) Joseph Lingay (1791-1851)。メゾネットの名の由来は, スタンダールがランゲーの上司である大臣ドカーズ Decases をイタリア語 casa の連想からメゾン (maison 家) と呼んでいて, その関係から部下のランゲーをメゾネット (maisonnette 小さい家) としたことによる。Voir *Souvenirs d'égotisme* [éd.1982], *op. cit.*, p. 438 et n. 2.
- 33) 1832年6月5日, 共和派として人気のあったラマルク將軍の葬儀の日, 葬列が反政府デモに発展して軍隊と衝突し, 市街戦となり, 翌日鎮圧された。井上幸治編『フランス史』(新編), 山川出版社, 1968年, 366頁(「七月王政」, 喜安朗)参照。
- 34) マルチノーはランゲーの経歴説明にこの記事の前半を用いている。Voir MARTINEAU, *Petit dictionnaire stendhalien*, *op. cit.*, pp. 304-305.
- 35) Voir C.G., *op. cit.*, IV, pp. 463 et 483.
- 36) 『回想』富永訳, 前掲書, 152頁。
- 37) 同上。
- 38) 同上。
- 39) Voir C.G., *op. cit.*, IV, p. 460. 『回想』第9章では, スタンダールは1832年6月, ティエリという出版商から出版の誘いを受けたことになっている。『回想』富永訳, 前掲書, 175-176頁。
- 40) Voir CROUZET, *M. Mysself*, *op. cit.*, p. 514 ; C.G., *op. cit.*, IV, pp. 47-52.
- 41) Voir C.G., *op. cit.*, IV, p. 420.
- 42) 『回想』富永訳, 前掲書, 152-153頁。
- 43) 同上, 153頁。
- 44) 同上, 154頁。

- 45) 同上, 161 頁。
- 46) 同上, 161 頁。
- 47) ドカーズのメゾネット (ランゲー) 起用については次の文献がある——Francis WAY, «Souvenirs politiques et littéraires (M. Lingay)», dans le volume *Entre amis*, Paris : Dentu, 1882, p. 466 ; André LELARGE, «Deux amis de Stendhal. Le baron de Mareste et “Maisonnette” (Joseph Lingay)», *Le Divan*, n° 221, juillet 1938, p. 213.
- 48) 『回想』 富永訳, 前掲書, 162 頁。
- 49) Voir CROUZET, *M. Myself*, *op. cit.*, p. 289.
- 50) 『青春の回想』(*Souvenirs de jeunesse*)。フィリップ・ルジュンヌは、『青春の回想』(『青春の思い出』)を『エゴチズムの回想』同様、自伝に分類していない(ルジュンヌ前掲書, 16 頁および 23 頁参照)。
- 51) シャルル・ノディエは、『青春の回想』巻頭のラマルチースに捧げた献辞のなかで、「ここに描いたのは若きころの私」と言っている。ノディエが作者の『回想』だが、出所不明の『マキシム・オダンの回想録』を抜粋したという体裁をとっている。Voir *Souvenirs de jeunesse*, in *Œuvres complètes de Charles Nodier*, 12 vol., Paris : E. Renduel, 1832-1837 (Genève : Slatkine Reprints, 1968), vol. X, pp. VII et XIII-XIV.
- 52) スタンダール『アンリ・ブリュラルの生涯』下(桑原武夫・生島遼一訳), 岩波書店「岩波文庫」, 1976 年, 215 頁。
- 53) Voir C.G., *op. cit.*, IV, p. 445.
- 54) Voir DIDIER, «Le manuscrit.», *op. cit.*, pp. 87-88.
- 55) Voir Michel CROUZET, *Regards de Stendhal sur le monde moderne*, Paris : Éd. Kimé, 2010, p. 211 («Stendhal passe du journalisme au roman ou du réalisme politique au réalisme esthétique»).